

# 子ども読書推進通信 NO.115 R7.1.15 発行：十日町情報館 林 篤子

2025年も、よろしくお願ひいたします。情報館での12月・1月の本にちなんだイベントをご紹介します。どちらも大好評でした。



## ◎みんなで飾ろう！クリスマスツリー

本を借りてくれたお子さんにクリスマスツリーのオーナメントをわたし、サンタさんへのお願い事や面白かった本のタイトルを書いてもらいました。クリスマスツリーが華やかに彩されました。



## ◎本をかりれば福がくる

1/4～12に本を借りてくれた方に「福笑い」を1セットプレゼントしました。情報館でスペースを作り、福笑いを完成させていただいたものを壁に掲示しています。「福笑い」は初体験というお子さんも珍しくなく、大人の方にも懐かしいと大好評でした。

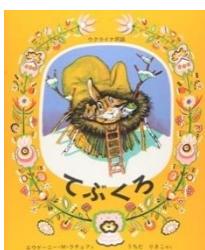
## ◎読書賞について

今年度（R6.4～R7.2まで）学校で一番多く本を読んだお子さんに情報館から「読書賞」の賞状をお渡ししたいと思います。対象は、小学校は低学年・高学年それぞれ1人ずつ、中学校は1人です。



読書賞受賞者には、今年度読んだ中で心に残る1冊を紹介してもらい、その本を情報館の「**R6年度読書賞受賞者の本棚**」で展示・貸出しをします。読書賞受賞者のみなさんの推し本を、多くの方に見ていただけたらと思います。お手数をおかけしますがご理解ご協力の程よろしくお願ひいたします。★読書賞に関する詳細は別にメールでお送りいたします。

## ◎絵本から気づかされること 『てぶくろ』（ウクライナ民話）



エウゲーニー・M・ラチョフ/絵 うちだりさこ/やく 福音館書店

雪が降り続く寒い冬、森の中でおじいさんがおとした片方のてぶくろに、ねずみが住みつきます。そこへ「私も入れて」と次々に動物が現れ、その度に「どうぞ」と受け入れ、最後にはクマまでが手袋の中に入ってきます。一緒にいたら身の危険を感じるはずの、オオカミやクマまでをも「仕方がない、まあいいでしょう」と受け入れる動物たちは、なんと心の広いことでしょう。

毎年、手袋が必要になる時期に、この本を幼児から低学年に読み聞かせをしています。「てぶくろの中に、こんなに入れるのかな～」と、にこにこしながら、子どもたちはどこまでも広がるてぶくろを面白がり、楽しそうに聴きいっています。

このお話はウクライナの民話です。戦争が始まってしまった今、改めて読み直すと、みんなで仲良く平和に暮らしたいという、ウクライナの人たちの切なる願いが込められ、語り継がれてきたお話だったのだと気づき、はっとしました。てぶくろには、いつの間にか窓や煙突まで造り付けられ、みんなで一緒に暮らしていくとする気持ちを感じます。狭いながらも、肩を寄せ合い、寒い冬を暖かく過ごせる快適な居場所だったのです。「てぶくろ」は正に祖国の象徴であり、限りなく広がる、人の心の広さを表している気がします。

ウクライナで語り継がれてきた話であることを話してから、高学年にも読み聞かせをしてみました。読み終わった後、子どもたちの表情が神妙なことに気づきました。今までの「面白い」とは違う気持ちになったと、多くの子どもたちが言いました。「動物たちがまるで色々な民族の代表のように思えた」「最後、あちこちへ逃げて行ったのが悲しかった」という子どもたちの言葉が印象的でした。

ファンタジーの中には物事の本質が隠されているのかもしれません。子どもから大人まで是非読んでほしい絵本です。（情報館誌「よむよむ」2月号の「本の力」でも投稿します）